

BLAH BLAH(ブラブラ)は地域、生活、政治そして時々スケートボードについて「下」からのヴォイスを届けるインタビューシリーズ。「下」とは「上」に属さないすべてのもの、つまり「現実」を指す。

BLAH BLAH: an interview series about localities, (and life) politics, (and not) and sometimes skateboarding from **BELOW**; that is, everything not part of the above, that is, from reality.

This interview with Maen Hammad took place on February 16, 2020. Following our conversation, unexpected developments with the COVID-19 virus and in my personal life led me to continually push back the project of publishing this zine. More than a year later, I'm so happy to be writing this introduction and sharing Maen's insights. Even though the world has changed considerably since this interview, I hope that some can still find the excitement and inspiration I feel when reading through Maen's thoughts on his human rights job, skateboarding, growing up in the US, and Palestine. A few things we speak about have changed because of the virus (for example, the skatepark build in Ramallah has been postponed), but we have otherwise elected to keep this interview as it originally happened.

Many many thanks to Maen for his time and patience, Katsuya Nonaka for the Japanese translation, and Momoe Narazaki for the illustrations.

序文:

このマエン・ハマドのインタビューは2020年2月16日に行われた。その後発生したコロナウィルスの予期せぬ流行と自分の個人的な事情のために、このジンの発行が延び延びになってしまったが、約1年の時を経てようやくこの序文を書くところまで来れた。この間に世の中はずいぶん変わってしまったものの、彼の人権擁護の仕事やスケートボーディング、アメリカで育ったこと、パレスチナのことなど、マエンの話は今でも興味深く示唆に富むものだ。

コロナウィルスの為、ここで話されている事柄のいくつかは変更を余儀なくされたが(例えばラマッラーのスケートパーク建設は延期となってしまった)、インタビューは内容を変えずに当時のまま載せることにした。マエンには改めて、忙しい中インタビューを受けてくれたことに感謝したい。

2 ウィル：最近どう？

マエン・ハマド：いい感じだね。こっちの冬はクソ寒いし雨ばかりだから参っているけど、時間を見つけてスケートしているよ。

まずはじめに、移民としてアメリカで育った経験について聞かせてくれる？

最初のインティファダーの時にパレスチナで生まれて、親は中流の医者だった。そのあと2回目のインティファダーが起きる前に母親がデトロイトで仕事を見つけて、家族でアメリカに移民した。当時は2歳だったから記憶はほとんどない。パレスチナについて覚えているのは子供の頃の夏休みに行った時の思い出だけだね。

アメリカでは、中流から中の上くらいの白人が多く住む、トロイというミシガン州の郊外の街で育った。自動車関係のエンジニアや弁護士、ビジネスマンなんかが多く住んでいた。難民の子供だった子供時代は色々な要素が混ざりあっていたね。今考えても面白いのは、アメリカに帰化したのは中学生だったんだけど、その前からスケートしていたしバリエーションにも乗っていたことだね。

奇妙な二面性だった。僕は完全なアメリカ人ではないけど、アメリカ人だと言って問題な

く通る。僕の見た目やししゃべり方から、パレスチナ人だとは思われない。それにとても良い公立学校に通っていて、かなり優等生だった。頑張って勉強していい大学に入って、いい仕事に就いて、という人生を親から強く期待されていた。それと、パレスチナ人は自分たちの文化や民族としての誇りをとても大切にすることから、家にはパレスチナの写真や地図、鍵(訳注:いつか故郷の家に帰るという意味合いで昔の家の鍵をいまでも持っている)なんかの、典型的なパレスチナのものが置いてあった。だから僕はアメリカ人であるだけでなく、家族からパレスチナ人としての意識も植えつけられた。子供の頃はそれが普通だったから、その大切さを理解できたのはずいぶん経ってから。今振り返ってみると、パレスチナ人であること、難民だったこと、アメリカへ移民したことは今の自分を形作ったと思う。

少し話を進めると、ロースクールを中退したんだよね？

「中退」と言っているけど、実際は単純に行かなかったただけなんだ。大学には全額支給される奨学金で入ったんだけど、ロースクールが始まる二週間前に、「行かない」と学校にメールしたんだ。

その頃、10年ぶりくらいに一人でパレスチナに行ってみることにしたんだ。学部課程(日本でいう四年制大学)を終えたところで、その後の計画もなかった。今でもどうして行こうと思ったのかよくわからないんだけど、叔父さんがビルツァイト(ウエストバンクにある大学。ラマッラーに近い)で面白いアラビア語のプログラムがある事を教えてくれて、それに申し込んだら受理されたから行くことにしたんだ。そのときの3ヶ月で、ミシガンの外にも可能性が広がっていることに気づけたんだから、とても大きな出来事だった。「弁護士になりたくなければ、ならなくてもいいんだ」ってね。それよりも、本当に勉強したいことを勉強していいんだ。

パレスチナにいる間、ロースクールには行かないかもって家族にずっと話していたんだけど、冗談だと思われていたね。でも帰国してから「中退」する決意をはっきり告げた。家族にとって、特に両親にとっては受け入れ難いことだったよ。真ん中の息子から期待を裏切られるんだから。家族の中に弁護士と医者がいって欲しいっていう移民ならではの事情もあって、兄は医学部に通っていた。両親からすれば、弁護士になれるチャンスを手に入れるためならどんな犠牲でも払うのについていう感覚だから、それを僕が全て投げ出すなんて、考えられないことだったと思う。

ミシガンに戻ってから、レストランで働いてお金を貯めることにした。それから結局は大

学院に入って、インターンで再びパレスチナに行った。それとは別に温めていたスケートのプロジェクトもあって、それまで映像作品を作った経験なんてなかったけど、貯めたお金でカメラとマイクを買った。そして出来たのが「Kickflips Over Occupation(<https://vimeo.com/135585858>)」という作品。インターン終了後にアメリカに帰国して修士号を取り、それからパレスチナに戻ってアムネスティの仕事を始めたんだ。

専攻は何だったの？

国際関係の修士号を持っているけど、専門は国際法。国際人道法が戦争犯罪に及ぼす影響や、紛争解決のプロセス、和平プロセスの手順等々、国際関係に重点を置いた様々な専門分野の授業があった。とても面白かったけど、当時の僕に今と同じくらいの余裕があったら、習ったことの全てについてもっと批判的になれたと思う。要するに、僕が取った修士号を取る人のほとんどは、政府の省庁に務めるのが夢なんだ。でもそれは僕の夢じゃない。僕はアメリカの外務官僚になんてなりたくない。

4 ただ、ワシントンDCに行った経験はとても大きかった。そこでインターンとして色々な人に会い、自分の行きたい道に適したレジюмеを作成できた。僕の場合は人権擁護の仕事に就くことだったから、ヒューマンライツウォッチと国連高等難民弁務官の事務所でインターンをした。学校外でたくさんの仕事をし、それはとても大事なことだと思う。ワシントンで働きたくはなかったから、パレスチナとレバノンの仕事にしか応募しなかった。卒業する数週間前に、アムネスティの仕事が決まって本当に嬉しかったよ。

アムネスティの仕事はどんなことをして1日が過ぎるの？

刺激的な日」と「退屈な日」があるんだけど、まず「退屈な日」は、朝オフィスに着いたらアラブ語と英語の各メディアでニュースをチェックして、それからメールに目を通す。それから例えばヘブロンの人権擁護者に対してイスラエル当局が行っている人権侵害についての緊急行動、もしくは署名活動、抗議文などについて、ベイルートのメディア担当もしくはロンドンのコミュニケーション・チームと会議をする。それからメールを送信したり文書を書いて翻訳チームに渡したりしていると1日が終わる。

「刺激的な日」はオフィスにいるより外に出ている時間が長いとき。例えば明日はイスラエル当局が管理しているオフェル刑務所に行き、セイミュー・アービッドと他二人が受けていた、イスラエル当局からの拷問についての法廷審問に出席する。そこで審問を注意深く記録して、当局もしくは第三国に向けてイスラエルによる拷問が行われていることを

知らせる緊急行動の下書きを作る。国際法と言葉の力を使って、囚人の解放、公平かつ適切な裁判、拷問についての調査を行うように働きかける。

君の人生とその仕事を切り離して考えるのは難しいと思うんだけど、仕事のスイッチをオフにする時はあるの？

アムネスティに来て最初の1年は仕事も刺激的だったし、プライベートな時間も仕事に割いていたね。人権問題に関係があると思ったらインスタにアップしたり、詳細を追って理解してからオフィスに持ち帰って議論したりしていたよ。でも結局は、自分は大きなパズルの1ピースに過ぎない事に気づいたんだ。人権についての講演や国際的なNGOにしたって全体のほんの一部に過ぎない。自分のやっている事がどれだけ価値のあることだとしても、それによって状況が具体的にどれだけ変わったのかを知る事はほぼ不可能だ。

だから自分に正直に、プライベートと仕事の線引きをするようにしている。18時を過ぎたら、よほど仕事が忙しい日でない限り、別のことに頭を切り替える。

すごいな。スケートボーディングに話を戻すと、最初にパレスチナに行った時にローカルスケーター達に出会わなかったら、今の自分はないと思う？

5

自分の人生を180度変えてくれた出来事はハッキリわかるよ。ベルツァイトでローカルスケーター達に出会ったことだ。その前から、どこかにもっと大きくて良い事があるはずだと思っていたから、それを見逃さないように常に気をつけていたんだ。

これも面白いと思うから付け加えておくと、実は大学時代はスケートから離れていたんだ。それなのにパレスチナに行く時にボードを持って行ったのは、当時は無意識だったけど、本当の自分、やっていて気持ちのいいものに戻ろうとしていたのかもしれないね。特に不便な外国に行くっていう時だったから尚更(自分が生まれた場所ではあるけど)。自分でも何故だかわからないまま、スケートボードを持って行ったことは本当に不思議だよ。

そうなる運命だったんだよ！

ベルツァイトのローカル達と出会って一緒につるんでいるうちに、SkatePal(UKを拠点に、パレスチナのスケーターをサポートするNGO)の事を知った。その瞬間に、またここに戻ってきてドキュメンタリーを撮ろうと思ったんだ。その内容は自分で言うのもなんだ

けど、僕の物語。でもその自分の物語を使って、スケートボーディングが人々にどれほどの影響を及ぼしたのかって所に光を当てている。だからもしパレスチナに行ってなかったら、今頃はデトロイトでつまない弁護士にでもなっていたはずさ！

子供の頃からスケートボーディングをしてきた事で、反骨的というか簡単には従わないような性格ができたんじゃない？それがあったから他とは違う道を行きたくなったのかな？間違いのないね。スケートボーディングから学んだ大きな事の一つは、想像力だ。スポットを見つければ、既にそこで滑っている様な気持ちになる。他人から見たら僕らは変人だよ。でも既に頭の中では自分がスケートしている姿を明確にイメージできているし、可能性が生まれている。僕の頭の中はそんな感じだ。弁護士にはなりたくなかったけど、ここパレスチナでの人生がやりたかったからトライをして、実際に実現させたのさ！

それにスケートをしていると気分がいい。パレスチナにいても、自分はもっと大きなシーンの一部だと思える。人権擁護の仕事よりもずっとね。スケートは自分の目の前で起きている事だし、これがどれだけ新しくて、絶妙で、ラジカルなものなのかを僕はよく理解している。だからより達成感があるんだ。

6

色々な意味で、スケートボーディングみたいに自分が本気で興味があってポジティブに取り組んでいるものほど、気持ちよく頑張れる。知識や経験が豊富なほど、大きな視点を持って小さな事にも進歩を感じることができる。

君がスケートボーディングを反抗の一つとして捉えているのも、すごく良いと思うんだ。スケートボーディングのポリティカルな面をスケーター以外の人にうまく説明するのはとても難しい。他のコミュニティほど抑圧的状況があからさまではない場所だと尚更そう感じる。スケートボーディングは他の社会運動にも役に立つと思う？

間違いなく役に立つよ。それにはスポーツとしてだけでなく、カルチャーやコミュニティとしてのスケートボーディングが必要だ。そこがスケートのヤバいところだし、ありきたりな言い方だけど、人と人が繋がる。似たような考えの人間同士が同じ時間を共有すれば、ポリティカルな面でも繋がるようになるし(ここでいうポリティカルとは、政治学者になったり政治を語ったりしなくても、何かに対する反抗やカウンターになれるし、それだけでも十分ポリティカルだということ)、本物のコミュニティが生まれる。

パレスチナを例にとると、こども達をアシラ(アシラ・アルシャマリヤにあるスケートパーク)に連れて行ったり、週に数時間でもスケートする時間を確保したり、それだけの事で

も占領に対する直接的な抗議行動になるし、自治権を主張することになる。自分の従兄弟が逮捕されていたり、2回目のインティファダで父親が死んでいたり、身分証が異なるという理由で家族に会えなかったり、ガザで同胞が殺されたりしているかもしれない。それでも僕は毎日1時間スケートして楽しい時間を作る。これは口だけじゃない、行動としての抗議活動だ。普通じゃない場所で普通の事を求めるのさ。

今君が話してくれた事は本当に大事な事だと思う。でも、いわゆるメインストリームのスケートメディアを10分でも眺めてみればわかるけど、一般大衆に向けたスケートカルチャーはそうしたアイデアとはかけ離れている、もしくは正反対なものに感じる。

ベリックスは見てる？あれなんかいい例だよ。ここ一年半くらい前から、キックフリップする警官とか、警察がスケートしてる動画がベリックスに出るようになったんだけど、そのどこがイケてるんだ？いかにもアメリカだよ。キックフリップができれば、それは拳銃を腰に着けてる警官だ。権力だよ。

本当に馬鹿馬鹿しい。この事で他人と言い合いになることがあるけど、黒人や有色人種の人々が警察から虐げられてきた現実と歴史に照らして話をする。スケーターの中に入れて僕たちが反抗しているはずの体制側にいる奴はいるし、大企業や資本主義の支持者だったり、アメリカの警察を支持していたり、レイシストもいるし同性愛者を嫌う連中だって、どんな奴だっている。それは理解しているんだけど、それでもベリックスのコンテンツで警察が出てくると文句を言いたくなる。

7

ふむふむ。

イスラエルの支持者たちが使う手口と同じ。「もっと対話をすれば状況は良くなる」と連中は言う。だが現実違う。僕は警察とじっくり話したいなんて思わない。警察はスポークスマンでも何かの代表でもない。警察こそが抑圧のシステムそのものなんだ。そのシステムが変わらない限り、警察との対話なんて意味がない。そういう考えの僕が、キックフリップができるからって警察の事をクールだなんて思う訳がない。

全く同意見。でもベリックスもスケートボーディングのコミュニティに文化的な貢献をしているのも事実だよ。自分達と違うからって、それは間違ったスケートボーディングの広め方だ、なんて言うものじゃないし。ただし、僕らもそれらとは違うスケートに対する見方や楽しみ方を広めることはやるべきだと思う。スケートの世界に入ってきたばかりの初心

者の人たちに、メインストリームとは違うスケートボーディングを知ってもらうにはどうしたらいいと思う？

スケートの商業的な部分は無くならない。僕らがそれを変えようと思っても、カンパニーやオリンピック、その他の大会だって病的なほどスケートカルチャーの一部だ。問題なのは、商業的な面はどんどん根付いていっているのに、シーンの為にロールモデルとなる人たちが減っている。ベリックスにはおそらく100万人以上のフォロワーがいて、スケートカルチャーに物凄い影響力を持っているのね。

今のスケートシーンはみんなスマホばかり見ている。特にキッズ。もし自分が今15歳だったら、もっとプロスケーターになりたいと思うだろうし、ビデオパートをもっと作りたいと思うだろう。すごいスケーターや映像を次から次へと見せられ続けているんだから。

昔は「BAKER3」を観たかったら、そのDVDを持っている必要があった。当時はプロスケーターの影響力なんて分かっていなかったし気にもしてなかったけど、今はレティシア（・ブフォーニ）やナイジャ（・ヒューストン）といったプロスケーター達が、インスタグラム上でスケーターというよりセレブとして扱われている。この状況は手の打ちようがないと思う。僕らより若い世代の子たちは、インスタグラムからカルチャーを知る事が自然な事になってしまっている。インスタグラムは広告とフォロワー、ユーザー、そしてコンテンツの

8 アルゴリズムで成り立っているだけだから、情報の受け手が誰であろうと関係ない。

「手の打ちようがない」って言うのは上手い言い方だね。でも幸い、僕らが惹かれているカウンターカルチャー的な、コミュニティをベースとした部分はどうなっても無くならないと思うんだ。ただし次の世代に自分たちの考えを伝えていくのは大事な事だね。

Skate After Schoolのインスタグラムの使い方や、自分のパソコンからパレスチナのスケートシーンを知ることが出来ることを考えると、若いうちにそういうものに触れる事で、スケートボーディングに自由を見出せるようになれるんじゃないかな。

それは最高な事だね。この「システム」の内部にも僕らの仲間はいて、良いことも起きている。数ヶ月前にライアン・レイがこっちに来て、スラッシャーにその記事とビデオが載る予定なんだ。スラッシャーにパレスチナの事について10ページも貰えるなんて、殆どの読者にとってはどうでも良いことだろうけど、僕らと似た考え方を持つ人たちや仲間、コミュニティの人たちには支持してもらえと思う。

SkatePalの次の大きな動きがあれば教えてくれる？特に君たちが将来的に運営を現地の人たちに委譲しようとしている事はみんなに知ってもらいたい。長く続いていく組織をボトムアップで作っていく上で、これはとても重要なステップだと思う。

正直に言うと、僕はもうSkatePalでアシスタントやコーディネーター的なことはあまりやっていないんだ。昔はボランティアに来てもらったりもしたけど、今は基本的に全て（ローカルの）アラムに任せている。それはさておき、次の大きなプロジェクトはラマッラーにスケートパークを建設する事だね。今年中か来年の初めあたりには完成の予定で、これは現地の人達に組織を受け渡すプロセスの第一段階だからとても重要だ。すでにそのプロセスは始まっていると感じているけど、パークの完成はとても大きい。

簡単には行かないだろうし、パークが出来たからといってすぐにスケーターが何百人と誕生するとは思わないけど、ラマッラーのサレイェット・クラブで2年間スケートのスクールをやってきて感じるのは、10人くらいのは暇を見つけて滑りに来ると思う。この10人がローカルシーンの始まり。5ヶ月後にそれが15人になり、1年後には20人になっているんじゃないかな。

そして自然と最終的に、ローカルスケーター達は自分達でパークを管理したいと思うようになる。外国のNGOがローカルのスケートシーンを作るっていうのはあまり自然なことじゃないよね。それが本当のローカルシーンであるなら、その主体はそこに住む人々であるべきだ。スケートパークができる事でそういう風になってくれればと願っている。これがボランティアができる最後の仕事。その後は彼らで独自の素晴らしいコミュニティを作り上げて欲しい。

9

それに個人的に、自分は今微妙なポジションにいると思うんだ。もう27歳だし、そのすぐ下だと21歳のアラムになる。その下になると16歳だよ。時々自分は若い子に混じって今だに古臭い考えを持ち続けているジジイみたいな感じになってないかと思うんだ。

でも別の見方をすれば、自分はこのシーンの目撃者であり、ある程度はその一員でもあるけど、ここは自分のシーンじゃないってことを忘れずにいることも必要だ。僕にはこの美しいシーンをただ見ていたいという気持ちと、そこに何らかの貢献をしたいという気持ちとが両方あって、その意味を常に考えている。良い仕事をしたいと思っているけど、自分はただの保守派のようにも感じる。他のみんなは全員僕よりも若い世代だからね。

パレスチナについて興味があって、何かしらのサポートをしたいと思ってる人にアドバイ

スがあれば教えてくれる？

一番は実際にパレスチナに来て、現地の現実を知って欲しい。手に負えないほど様々な抑圧が、至る所に存在している。だけど、素晴らしい場所でもある。だからパレスチナに来て欲しい。そしてここにいるパレスチナ人の話を聞いて本当の事を理解して欲しい。

それと同時に、出来たら自分個人の経験も活かして欲しい。例えば君がスケーターであるだけでなくLGBTQIA+でもあったり、先住民の出身だったりしたら、君の物語や経験を使って、より大きな視点でパレスチナ人と協力できるかもしれない。

僕も含めてパレスチナのスケーターも同じ様にした方がいい。自分が直面する抑圧を軽くキックフリップで超えていく様な、ラディカルな方法を知っているスケーターは結構いるはずだ。ベリックスじゃなくても、そうした様々なレイヤーを繋げた大きな視点を持ったコンテンツを発信できる。ここで言うコンテンツというのはスケートボーディングとその根っこを共有するカルチャーのこと。スケートカルチャーはこれからも日々独自の成長と発展を続けていく。その中でそれぞれのコミュニティについて学び合うことが僕らの宿題だよ。

素晴らしいアドバイスをありがとう。最後に、最近あった出来事で、みんなに伝えたいような素晴らしいと思ったことはある？

10

個人的に成長したなと思ったのは、シルクスクリーンを覚えたこと。頭の中やコンピューターで練ったアイデアを、具現化できる。アイデアを物理的な存在として生み出すという事は、スピリチュアル的にもとてもラディカルな事だと思う。クリエイティブな人たちには、それを続けて欲しい。それがどんなにニッチなものだとしても、続けてくれ。







WILL: How have you been lately?

MAEN: I've been good, just sort of just struggling in this obnoxiously cold and wet winter. Trying to skate when I can.

W: To start with, I'm curious to hear what your experience was like to grow up as an immigrant in the U.S.

M: I was born in Palestine as the son of a middle class doctor during the first Intifada. We moved between the first and second Intifada as my mom got a job in Detroit. I have almost no recollection of this time because I was only two years old, so I mostly only remember Palestine in the trips I took throughout the summers while I was growing up.

I was growing up in a middle/upper-middle class white suburban city called Troy, Michigan. Lots of engineers, lawyers, and business people, many of them tied to the auto industry. It was a mixed bubble to grow up in as a refugee, and I was naturalized as a U.S. citizen in the 7th or 8th grade. I always think it's funny—I was already skating and able to varial kickflip before I became a naturalized citizen.

For me, it was a weird dichotomy. I'm not quite American, but I could pass as an American quite easily. People would look at me, hear me speak, and not assume I was Palestinian. I also went to a very good public school, and the priorities at that time were quite benign; I was forced to focus on studies so I could get into a good university so I could get a good job and so on... But at the same time, Palestinians hold their culture and integrity quite close, even in their homes. So in my home you would see photos of Palestine, a map, a key, the typical sort of Palestinian things. So I'm not just American, and my family really ingrained Palestine in me. I sort of breathed it throughout my upbringing, but I didn't really understand the importance of it until quite a bit later. Looking back in hindsight now, I can see that being a Palestinian, a refugee, and an immigrant really shaped who I became.

W: Skipping forward a bit, what was it like dropping out of law school?

M: It's interesting, I say I "dropped out" but the truth is, I got in to university on a full scholarship and I simply didn't go. I emailed them two weeks before I was supposed to start and told them it's not going to happen!

So the story around that is that for the first time in over I decade, I decided to go to Palestine by myself. I had just finished my undergrad, and I had no plan. I'm not even sure to this day what exactly pushed me to go, but my uncle had mentioned an interesting Arabic program at Birzeit

[University in the West Bank, close to the city of Ramallah]. I applied, got accepted and just decided to go. The time I spent there ended up being the most influential and important three months that showed me opportunities outside of suburban Michigan. It showed me that, for example, “you don’t have to be a lawyer if you don’t want to be,” and you can actually study something that intrigues you.

I kept talking to my family throughout the trip and began telling them I wasn’t so sure about law school. They thought I was kidding, but when I returned I told them I already made the decision to “drop out.” It was uncomfortable for my family, especially my parents. Having their expectations challenged by their middle son was not easy. There’s also an immigrant culture side as well. My brother was in medical school at the time, and every immigrant family wants a doctor and a lawyer. I think my parents would have given up anything to be in my shoes and have that opportunity, and it was hard for them to imagine that I was giving up everything.

Back in Michigan, I began working at a restaurant and saving money. I eventually applied to grad school and got an internship in Palestine. At the same time, I also knew I wanted to do this skate project. I had never done anything like making a film before but I saved up enough money to buy a camera and microphone. I went back to Palestine to begin my internship and gain practical experience, and during this time I filmed *Kickflips Over Occupation* [link to video:]. At the end of that trip, I returned to the U.S. and did my masters degree. Finally, after that, I returned to Palestine again and began my current job at Amnesty.

15

W: What did you study?

M: I have a masters of international affairs, but I concentrated on international law. It involves understanding how international humanitarian law affects war crimes, how things like a conflict-resolution process happen, what a peace process look like, etc... it was a heap of different, multi-disciplinary classes focusing on international relations. It was quite interesting, but if I had the headspace I have now, I think I would be much more critical about everything I learned. I’ll say this; most people who did my masters, their dream was to work at the state department. That’s not my dream. I don’t want to be a U.S. foreign diplomat.

However, getting thrown in to D.C. ended up being the most important thing. It’s there that you intern, meet people, and build resumes suited for the doors you wanted to open. In my case it was more towards human rights, so I interned with Human Rights Watch and with the office of the

high commissioner for refugees... I did a lot of work outside of school that I think was really important. I didn't want to work in D.C. and I only applied to jobs in Palestine/Lebanon. A few weeks before I graduated, I was grateful to get the job at Amnesty.

W: Can you tell me briefly what a day is like at Amnesty?

M: Ok, I'll give you an "exciting day" and contrast it was a "boring" one. A "boring day" would be like me going to the office, doing a little bit of media monitoring to see what's happening in Arabic and English media, and reading through my emails. Then perhaps a meeting or two with media colleagues in Beirut or with a communications team in London to update our urgent action or petition or letter to an Israeli authority about a human rights violation on a human rights defender in Hebron. I'll do that, send my emails, write a letter, pass it to the translation team, and that will be a day.

A more "exciting day" would be way less in the office and more in the field. For example, tomorrow I'm meant to go to Ofer prison, which is a prison the Israeli authorities run, to attend a court hearing for Saimir Ar-beed and two other people that have been tortured by Israeli authorities. We will attend, take notes on the court case, draft up an urgent action to tell authorities or third states that Israeli torture is taking place, and use international law and language to work towards either releasing the prisoners, ensuring there's fair and adequate trials, and/or opening up investigations into allegations of torture, etc...

W: I imagine it's difficult to separate your personal life from work, or simply find moments for yourself to "turn off"?

M: I think the first year I was here with Amnesty, there was a lot of excitement about my job and I sort of allowed it to consume my after-hour stuff. If I would see something that was human rights related, I would put it on my Instagram or take notes, absorb it, and bring it back to the office to talk about. But eventually, I think you get to the point where you realize you're just a tiny piece of the puzzle. Human rights discourse, and international NGO's as a subset of that, are just a tiny little piece. I think that the reality is, while what you do may be very credible and worthwhile, it's almost impossible to measure the material change.

But at the end of the day, I try to be honest with myself and set boundaries with my work. After 18:00, if I don't have a super busy day, I make sure I'm deep diving into something else.

W: Wow. To tie in skateboarding again, if you hadn't made that original solo trip back to Palestine and met the local skaters there, do you think you still would have eventually ended up where you are now?

M: If I can pin down a handful of moments in my life that shifted the direction a 180 degrees, it was definitely randomly finding skaters at Birzeit. For me, I was already sort of being probed with this idea that something bigger and better exists, and I just have to keep my eyes open...

This is also sort of interesting to note, but I had actually taken a big break from skating during my undergrad studies. Despite that, I still brought my skateboard to Palestine, and unbeknownst to me at the time, I was pinning myself back to who I was and what made me comfortable as a person, especially in a place that was initially uncomfortable and foreign to me (despite being the place where I was born). So by bringing my skateboard and then not really knowing why I brought it, it was too crazy...

W: It was meant to be!

M: I met the skaters at Birzeit, hung out with them a bunch, and eventually learned about SkatePal [Non-profit organization supporting skaters in Palestine based in the UK] and volunteering opportunities. Immediately, I sort of knew in my head that I was going to come back and make a documentary. The story was, and I say this quite selfishly, the story was about me in a way. But it was also using my story about skateboarding to highlight the power and impact of skateboarding for people that are not me. So yeah, if I hadn't gone to Palestine, I'd probably be a lame corporate lawyer in Detroit!

17

W: You grew up skating so maybe you also had something inside you, like a rebellious nature or something that didn't quite conform. Maybe it was always going to push you to try something different?

M: Definitely. One thing I really cherish about skateboarding is they way we can imagine and visualize things. Like, if you see a set or a spot, you can already feel like you're going to do it. Other people may look at you like you're crazy, but in your head you're already visualizing yourself doing it, so becomes a possibility. I think in my mind, that's what it was. I didn't want to be a lawyer, but I really wanted to try this—to try this life here in Palestine. So I decided I was going to do it, and I did!

Skateboarding has also just been something that comforts me. When I'm here in Palestine, I can see that I'm part of this bigger picture. Way more than say, with my human rights job. With skateboarding it's much more satisfying because I really understand how new and nuanced and

radical all of this actually is, and it's taking place right in front of me. In a lot ways, when you're genuinely interested, or volunteering, or involved in a more proactive way, it feels much better to put your energy into something like skating. You're more equipped to understand and see the tiny bits of progress in the context of the bigger picture.

W: I really like how you also frame skateboarding as a tool of resistance. I'm interested in how this political aspect of skateboarding is very hard to articulate or highlight in other parts of the world, especially where oppression is not as obvious in certain communities. Do you think skateboarding can play a role in other social movements?

M: I think it can definitely play a role. What is needed is not just skateboarding as a sport, but skateboarding as a culture and community. I think that's what is so dope about it. It sounds like a cliché, but it really does collect people. So if like-minded people are sharing time together, and these people happen to also connect in a political way (by political here, I don't mean in terms of being political pundits or speaking politics, but in that they can just be anti- something or counter something, which in and of itself is quite political), a real community can emerge.

18 Using Palestine as an example, let's take the kids skating in Asira [Skatepark in Asira Al-Shamaliya]. By simply ensuring that they are giving themselves a couple of hours a week to skate, they are not only in direct confrontation with the occupation, but asserting their ability to care for themselves. My cousin might have just been arrested, my father may have died in the second Intifada, my family can't see me because they have a different ID, my people in Gaza are being killed... and yet, I'm still going to to give myself an hour every day to skate and have fun. This is the type of confrontation that is more than talk, it's action. It's the ability to chase something normal in a place that's so abnormal.

W: I think these communities are incredibly important. But at the same time, if you spend ten minutes on any mainstream media skate media outlet, the more "public" side of skateboarding culture feels so disconnected and even at time antagonistic to those ideas.

M: Do you follow the Berrics? They're an interesting example. Over the last year and a half they keep posting these sort of cop-skating videos, like a cop doing a kickflip or whatever. Why is it cool that there is a cop doing a kickflip? It's really American. A cop with a gun on his waist doing a kickflip... Power. Authority. In my head, I feel like this is so stupid. Sometimes I get into arguments with people over this, and I try to bring up the

reality of black and brown skaters and people who have suffered since the historical inception of the police, but I realized that some skaters are also just part of this shitty system that we all say we're trying to fight against. Some are just pro-corporate, pro-capitalist, U.S. American police-rooting, racist, homophobic, all of that shit. But whenever I see a cop on the Berrics thing I still can't help just trash talking it.

W: Hah!

M: It's the same normalization argument that pro-Israeli people use. Like, "you just need more dialogue and things will be better." But the reality is that no, I'm not trying to ever sit down and have a conversation with a cop. He is not a spokesman or some representative—he's the very system of oppression itself. So until that changes, why would I have a conversation with him? And why would I ever entertain the idea that him doing a kickflip is somehow cool?

W: I agree completely. But we should also admit the Berrics wields a lot of cultural power (in skateboarding communities). Obviously it's not our place to police these different outlets and forms and say this is not the correct way to spread skateboarding. But at the same time I think we should promote the freedom to choose different ways of looking at skating and experiencing it. How can we share a different side of skateboarding for those who are just beginning to enter the culture?

19

M: The consumer side of skateboarding has been around forever. We try to differentiate it now, but because of all these companies, the Olympics, competitions—it's way more pathologically a part of the culture. I think the issue is, since the consumer side been more ingrained, you're seeing less of the individual in the role-making and duty-bearer. The Berrics probably has a million followers, and that's a massive part of the cultural reproduction of skateboarding. With skateboarding nowadays, people are always on their phones, especially kids. Honestly I think if I was the fifteen year old me growing up now, I would so much more want to be a professional skater and have skate parts simply because now you're seeing it so much more. You're bombarded with amazing skaters and footage all the time.

I still remember when you wanted to watch Baker 3 you had to have a copy of Baker 3. At that time, I don't think you quite knew or cared what all the the celebrity clout of being a professional meant. Now you have professionals like Leticia and Nyjah—these people on Instagram function much more as celebrities than skaters. I don't think it's fixable. We've

reached the point where the generation younger than us is just consuming this cultural production through Instagram, and since Instagram is just an algorithm of ads and followers and membership and content production, it doesn't even matter who the consumers are.

W: Not fixable is a good way to put it. But thankfully, I think no matter what, there's always going to be the side of skateboarding that we're more interested in, a sort of counter-cultural and perhaps more community-centered side. I think it's really important to try and pass on some of these ideas to the next generation. I think of how SkateAfterSchool is using Instagram, or how I can follow the skate scene in Palestine from my computer... Maybe if you're really young and exposed to something like that, you can be encouraged to find your own freedom in skateboarding.

M: That is what's awesome, that there is enough allies within the "system" that we can still see good things happen. Ryan Lay came here a few months ago and Thrasher is going to run an article and video part about it. While I have a feeling a ten page piece on Palestine in Thrasher isn't the content most of its subscribers are going to care about, it is the content that the folks who are like-minded, the allies, and the people in the communities will really get behind.

20

W: I'm wonder if you can talk about any big next steps for SkatePal. One thing I want to highlight about the organization is that they seem committed to hand it off to the locals in Palestine. This seems to be one of the most important steps in building an organization from the bottom-up that is long-lasting.

M: To be honest, I'm not doing much for SkatePal in terms of assistance or coordination anymore. I used help with the volunteers and all that stuff, but now that's sort of all on Aram and becoming more of his responsibility. Otherwise, the skatepark in Ramallah is the next big project—it's meant to happen this year or early next year. I think the park is crucial because because it is the beginning of the exit strategy. The exchange to locals is important and I'm seeing it happen, but the park build is very important.

I don't think it's going to be easy, and I don't want to be naïve to think that a hundred skaters will suddenly materialize after the park is built, but after doing about two years of classes at the Sareyyet Club in Ramallah, I would estimate there's about ten skaters who would come to the skatepark with every free second they have. I think those ten are the beginning of the community. And maybe five months later it will be 15 skaters and

20 the year after that.

Eventually there's going to be enough organic push from the skaters here that they're going to want to have full autonomy— it is not necessarily organic to have an international skate NGO continue to develop the skate scene. If it's really a local scene, it will belong to the members of the community. So that's what I'm hoping with the skatepark—that there's this last push for volunteers to help to get it done, and then it evolves and blossoms into its own intimate and beautiful community.

I also personally feel like I'm in an awkward position. I'm 27 years old and the youngest skater next to me is Aram, and he's 21. The one under him is 16. Sometimes I wonder if I'm just carrying around these old grandfather ideas around these young people. But in other ways, I need to remind myself that while I'm a witness and a member to a degree, this is not my scene. I'm playing a dual role; part of me just wants to watch because it's so beautiful, but part of me also wants to give back—I'm always calibrating what that means. I'm trying to make sure my role is credible, but it is interesting to feel like I'm part of this “old guard” and a whole generation of skaters are younger than me.

W: Do you have any advice for people who are already interested in Palestine and want to express solidarity or support?

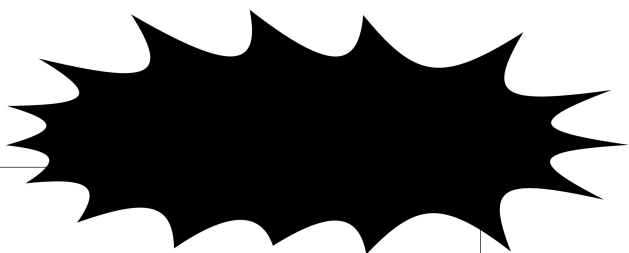
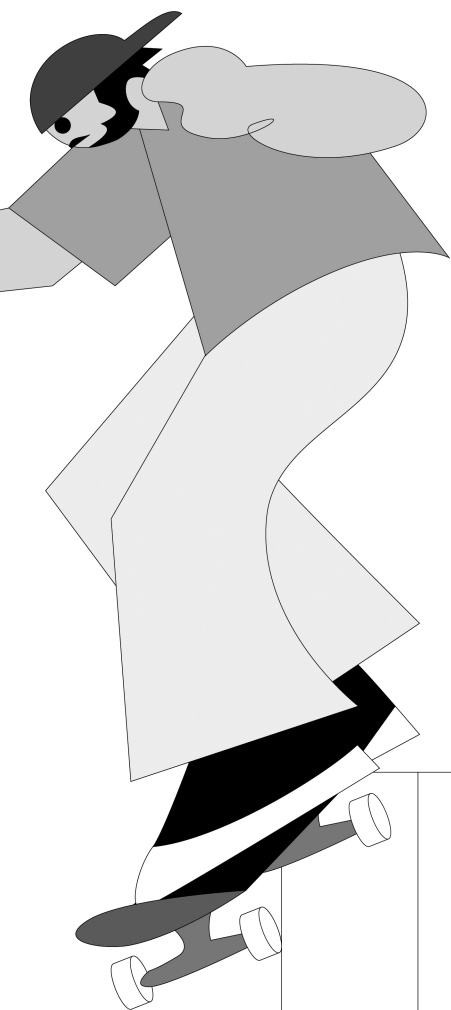
M: I would say the main thing would be to come visit Palestine and just get smacked with the reality that it exists. While there's overwhelming layers of oppression everywhere, it's still such an amazing place. So come to Palestine and try to understand what it's like by listening to the Palestinians here.

And at the same time, if you're able, use your own cultural connections... For example, if you're a skater in an LGBTQIA+ community, or a skater in an Indigenous community, perhaps you can utilize your own narrative and experiences and incorporate Palestine in a bigger picture.

I would also recommend skaters in Palestine and myself to do the same. I believe there's enough skaters that exist who are each carrying their own radical forms of kickflipping over whatever source of oppression they face. We can link enough of these layers to create a larger picture where the Berries, for example, is not the only content producing source. And by content I mean cultural information that shares skateboarding and its roots. This culture continues to grow and develop its own flavors and nuances, day in and day out. So it's really on us to go out of our way to do our homework and learn about each others' communities.

W: That's awesome advice. The last thing I would like to ask is, is there anything you found inspirational lately that you'd like to share?

M: I think the most recent development for me is just learning screen-printing and seeing how I can turn ideas from my head or a computer into a real physical thing. I think the transferring of an idea into a physical object is a very spiritually radical thing. For those who are creative and creating, keep doing it. Whatever niche element you're in, keep doing it.



Find Maen here:

www.instagram.com/maenster

<https://maenhammad.com>

Find information about SkatePal here (and volunteer if you can!):

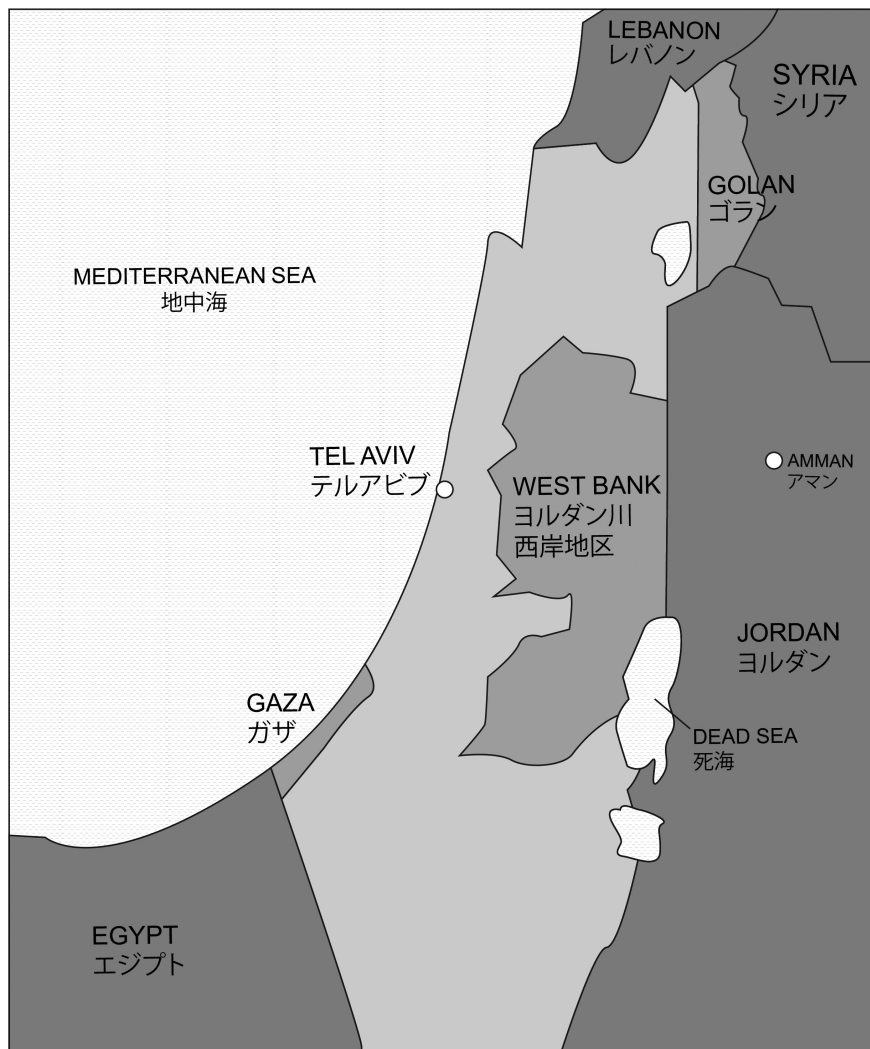
www.skatepal.co.uk

Find Katsuya here:

www.katsuyanonaka.com

Find Momoe here:

www.instagram.com/momoenarazaki



Printed Summer 2021

www.barbarianbooks.institute
info@barbarianbooks.institute

willalexshum@protonmail.com

